

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	五十年のお付き合い：松本三郎さんを偲んで
Sub Title	
Author	池井, 優(Ikei, Masaru)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2009
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.82, No.11 (2009. 11) ,p.184- 185
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事：松本三郎先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20091128-0184

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

たものであろう。たしかに誠意をもって事に当たってればその成否は問題ではなくなるはずで、そういう悟りの境地に達したら必然的に余計な力は入らなくなるし、いつも平常心で事に当たれるようになるだろう。松本さんがどんなときにも平常心でいられるのは彼がすでに悟りの境地に達していることの表れであって、そうした彼の精神が最も遺憾なく発揮されたのは、一九八三年五月に日吉記念館で行われた義塾創立一二五年記念式典で彼が司会の大役を果たしたときである。式典は昨年一月の創立一五〇年記念式典に較べればかなり簡素なものであったが、それでも国内外から多数の来賓を迎えての式典であったから、そこで司会をするとなれば緊張して当然なのに、松本さんは普段と少しも変わらぬ口調と態度で見事にその大役を果たされたのである。

こういう松本さんと一緒に仕事ができただけは私にとつては大変な幸せで、彼への感謝の念は尽きることががない。

名誉教授 田村 茂

五十年のお付き合い

——松本三郎さんを偲んで

松本さんのお付き合いはちょうど五十年に及んだ。一九五九年四月、大学院の修士課程に進学し、英修道教授のご指導を受けることになったとき、松本さんは博士課程に在学中であった。

初対面の時、その立派な体格とメガネの奥のやさしそうな目が印象的だった。英先生のご専門分野の東洋外交史のうち、私は日本外交史を継承し、松本さんは法学部政治学科が地域研究を充実しようと設置した東南アジア論を専攻されることになった。以後英門下の兄弟弟子として、英ゼミの学生の面倒を見たり、合宿に参加したり、学会ではじめて報告することになった際、予行演習の場を設定して内容とともに決められた報告時間を守るようにと時計片手にチェックしていただいたこともあった。英先生にご注意を受け落ち込んでいたとき慰めたり、励ましたりしていただいたこと、母が亡くなったとき、留学先から長い手紙を頂戴し「君のお母さんのことをいろ

いろ考えて昨夜は寝られなかった」と書いてきてくださったこと、新婚間もないお宅に英ゼミの学生と押し掛け食い荒らしたこと……思い出すことばかりだ。

理事長を務めた日本国際政治学会、アジア政経学会など学会で活躍されると同時に、松本さんを語る際に外せないのが、学校行政とのかかわりである。慶應義塾志木高校の校長として赴任された際は、さまざまな問題を温和な態度で処理され、どんと構えたその姿から「とど校長」と呼ばれ、教員と職員の信頼を集めていたと聞いた。

志木高の校長につづいて欠かせないのは、石川忠雄塾長のもとで務めた常任理事としての役割である。マレーシア滞在中、石川塾長から国際電話で理事就任を要請され、留学を途中で打ち切って帰国、慶應義塾創立一二五年の記念行事に専心され、募金、藤沢キャンパスの充実、記念式典の開催などに尽力された。石川塾長の信頼がいかに厚かったかは、その後三期にわたって理事として石川体制を支えたことに示されている。その間、文部省関係の中教審、大学審、設置審などに参加、私大連にも深く関係し、大学行政に通暁していった。そこで培った教育行政のノウハウは、防衛大学校校長として従来理科系

であった同校の社会科学系を強化する折に發揮された。

防大校長を退職後、同大教官の研究費確保のため防大學術振興会会長として資金集めに奔走、さらに學術財団日本安全保障・危機管理学会会長として、防大や我が国の安全保障のための活動を惜しまなかった。引退後、英ゼミOB諸君の誘いでよく旅行にご一緒した。いつも睦子夫人を同伴され、箱根、伊豆、軽井沢といった国内はおろかオーストラリアまで足を延ばした。

平均寿命が八十歳をこえるようになった今日、七十七歳は早すぎる旅立ちである。アルバムを改めて見てみる。大柄なため皆のなかでひときわ目立ち、ニコニコしている松本さんの姿がある。写真から「池井君」という宇和島なまりのあの声が聞こえてくる。

教育者、研究者さらに学校行政の面でも手腕を發揮され、ご家族にも恵まれ充実した生涯であった。

ご冥福を祈りたい。

名誉教授 池 井 優